

『略奪婚』と『男性問題』

——エチオピアのふたつのコメディ作品にみるジェンダー政治と笑い——

西 真如

狡猾さと誠実さが交錯する男女の駆け引きは、コメディの格好の主題である。本稿では、半世紀近い時を隔てて発表されたふたつのアムハラ語コメディを題材として、近現代エチオピアにおけるジェンダー政治の展開と笑いについて考察したい。(アムハラ語は、エチオピアで最も広く用いられる言語である。以下、文中でアムハラ語の語彙を示す場合には、カッコ内にイタリックス体のラテン文字で表記している。)

『略奪婚』(*Telfo Bekise*)は、20世紀エチオピアを代表する劇作家のひとり、メンギストゥ・ランマが1959年に執筆した戯曲であり、伝統と近代のはざまに生きる貴族階級の男子たちと、ひとりの「自立した」女性との掛け合いが描かれる。伝統的なジェンダー規範を書き換える「新しい女性」の到来を告げるプロットは、英国の劇作家バーナード・ショウの影響を受けたものである。これに対して『男性問題』(*Yewendoch Gudday*)は、2007年に発表されたアムハラ語映画作品である。エチオピアでは近年、多くのアムハラ語映画が公開されているが、中でも『男性問題』は代表的なコメディ作品のひとつであり、2011年には続編も公開されている。エリート男女を描いた『略奪婚』とは違い、『男性問題』は製材工場で働く金のない男が、じぶんを裏切ったガールフレンドに復讐しようとするところからストーリーが展開する。

本稿では以下、戯曲『略奪婚』の概略とその社会背景、とりわけ当時のエリートにとって難問であった「伝統と近代の対立」について述べる。またエリートの物語としての『略奪婚』から、民衆の物語としての映画『男性問題』への視点の移動をもたらしたエチオピア社会の変化について述べる。続いて『男性問題』の概略とその社会背景について述べる中で、経済格差の問題や、エチオピアの現政権による女性のエンパワメント政策に言及する。その上で、落語の演目にあられる男女の駆け引きの描写なども参照しながら、ふたつのコメディ作品にあられるジェンダー政治について考察したい。

1. 戯曲『略奪婚』とその背景

メンギストゥ・ランマは1928年、エチオピア正教の長司祭(*aleqa*)を務める父のもとに生まれた。エチオピア東部の都市ハラール教会でアムハラ語の伝統的な詩作(*qine*)を学んだのち、首都アジスアベバで近代教育を受けたメンギストゥは、ロンドン大学に留学して社会学と政治学を学び、1954年に帰国している。当時のエチオピアではハイレセラシエ一世皇帝(在位1930-1974)が、旧来の貴族支配を温存しながら同時に国家の近代化を進めるという、矛盾した課題に取り組んでいた。体制内では、伝統的な貴族の利権を維持しようとする「守旧派」と、近代教育を受けたエリート官僚らを中心とする「改革派」との間に緊張が高まっていた(Bahru

2002)。帰国後のメンギストゥは、外務省の要職を務めるなど体制内で地位を確保しながら、守旧派への反発を強めていった。

『略奪婚』は、エチオピアの伝統的知識人としての教養と、改革派エリートとしての価値観を併せ持ったメンギストゥが最初に手がけた近代戯曲である。アジスアベバで1962年に初演され、1964年には英語訳が出版された(Mengistu 1964)。作品のタイトルは、エチオピアの伝統社会で男性が妻を取る手段のひとつである略奪婚(*telefa*)を指す。エチオピアの伝統社会における婚姻は、長老を介した話し合いにもとづいて決定されるのが通例であるが、話し合いで承諾が得られる見込みがない場合に、男性が未婚の女性を力ずくで連れ去って妻にすることがある。これが略奪婚であり、事後的に男性側の親族と女性側の親族とのあいだで話し合いが持たれ、一定の補償が支払われることを条件として結婚が追認されることが多い。当時のエチオピアでは、政府の黙認のもと、公然と略奪婚がおこなわれていた。

メンギストゥの戯曲においては、略奪婚はエチオピアの「旧道徳」の象徴として扱われる。メンギストゥは、エチオピアの改革派エリートにとって難問であった「伝統と近代」の対決を主題にしながら、この作品を軽妙な喜劇に仕立てている——第一幕は、幼なじみで学校のクラスメートでもあった、ウォンダイエフ、グラグレ、バザブフ、アラガの4人の独身エリート男子たちの掛け合いである。アジスアベバの郊外にある別荘で週末を過ごすウォンダイエフのもとへ、グラグレが訪れる。哲学者気取りのグラグレは、彼のガールフレンドが、彼を愛しすぎているゆえに煩悶していると語りはじめる。これに苛立ったウォンダイエフは、「もし彼女がそれほどきみのことを愛しているなら、彼女はどのようにきみと結婚して、[その苦しみを]終わらせないんだ?」と混ぜ返す。グラグレは質問に答える代わりに、「ぼくがどうして彼女と結婚しないか、と聞いてるんだよね?」と問い返す。男のグラグレにでなく、彼女に結婚を決める権利があるかのような言い草は、聞き捨てならないのだ。これを受けてウォンダイエフが「おまえがもし男だったらば、とっくに彼女のことを略奪して結婚しているだろうよ」と挑発する。このことばをきっかけに、ウォンダイエフとグラグレは、かつて彼らの父祖たちに許されていた(と彼らが想像するところの)「男らしさ」に自己を同一化してゆく。ウォンダイエフが「[祖父たちの時代には]、男は男で女は女だった!」と言えば、グラグレは「[祖父たちは] こんにちの教育という名の小賢しさに手足を縛られていなかった。彼らは自由な行為者だった!」と同調する。ちょうどそこへ、バザブフとアラガが、両手を後ろで縛られた女性とともに登場する。ひと目みて、貴族の家柄に生まれ近代教育を受けた子女とわかる。実はウォンダイエフは、このふたりに対しても女性の略奪をそそのかしていたのだ。それを真に受けたふたりは、自らの男らしさを立証するために、アジスアベバの路上で見かけた女性(タファサチという名前である)を略奪してきた。以上が第一幕の概略である。

なすすべもなく略奪されてしまったかに見えたタファサチであるが、続く第二幕では彼女が、近代と伝統のはざまで混乱したエリート男子たちの企てを、すっかり書き換えてしまう。彼女は男子たちに向かって、「あなたたちは、古代チベット人よりも近代化が遅れてるわ。チベットでは、複数の男がひとりの女と結婚すると聞いたことがあるけど」と(チベットの人たちには失礼な言いぐさで)こきおろした上に、この場で結婚相手を決める権利があるのは彼女だけであると宣言し、「私があなたたちの中から結婚相手を選ぶことにする」と言い放って男子たちを

困惑させる。

ここでタファサチに与えられた役割は、ジョージ・バーナード・ショウの戯曲『ウォーレン夫人の職業』の主人公ヴィヴィを思わせるところがある。彼はヴィヴィを、旧道徳を打ち破るために社会とたたかう「新しい女」として描いているが（滝本 1990）、『略奪婚』のタファサチも、まさに旧制度と対決する近代を体現する女性である¹⁾。ただし、エチオピア近代演劇の政治性について論じたプラストーは、『略奪婚』におけるタファサチの役回りについて、メンギストゥが「自らの思想を表明するための手段に過ぎない」と評している（Plastow 1996:97）。メンギストゥが『略奪婚』を書いた主要な動機は、新しい女性像の提示よりも貴族階級への批判にあったと見たほうが良さそうである。

2. エリートの物語から民衆の物語へ

大土地所有制を基盤としたエチオピアの貴族支配は、1974年の軍事革命のあとすべての農地が法令により国有化され²⁾、農民に再配分されたことによって解体された。エチオピアの著名な社会学者デサレニは1982年、この農地改革について、農民搾取の社会的・制度的基盤を廃絶した、最も重要な社会改革であると評価したが（Desalegn 1982）、その期待は裏切られた。1984年とその翌年の干ばつが、エチオピア北部の農村を中心に大規模な飢饉を引き起こしたことから、農村の貧困が依然として深刻であることが明らかになったのである。

軍事政権下の内戦を戦い抜き、1991年に政権についたエチオピア人民革命民主戦線（EPRDF）は、西側諸国の協力を得て、農村における飢饉の発生を早期に予防するための体制を構築した。EPRDF政権のもとでは大規模な飢饉は起こらなくなったが、母国があいかわらず世界の最貧国と見られ続けることは、エチオピアのエリートにとって大きな屈辱であった。エチオピアの社会で指導的な立場にある人たちが、少なからず自信を取り戻すきっかけを提供したのは、2005年頃から始まった急速な経済成長と、それにとまう首都アジスアベバの景観変化であった（西 2014）。

だが経済成長から取り残されてしまった人たちはもちろん、なんとか取り残されまいと工夫を重ねる人たちにとっても、日々の生活は悪戦苦闘（*tigil*）の連続だと感じられる。彼らにとって貧乏（*dihinnet*）は、国家のプライドの問題であるまえに身近な経験の問題なのである。したがって、『男性問題』だけでなく、2010年の『笑い事じゃないよ』（*Ayasqim*）、2013年の『中国製造』（*Made in China*）といった近年のアムハラ語コメディ映画が、アジスアベバで暮らす金のない若者の悪戦苦闘を好んで描いてきたことは、決して驚くべきことではない。

『中国製造』は、アジスアベバの若者たちが、偶然に出会ったひとりの中国人青年を、ニセモノの投資家や医師に仕立てて、一攫千金を企むというはなしである。『中国製造』というタイトルは、もちろんこの中国人青年を指しているが、その彼がニセモノになりすます筋書きと重ねることで、アフリカに出回る中国製品は、見かけ倒しのニセモノばかりではないかと揶揄する含みがある。アフリカにおける中国の経済的・政治的・社会的プレゼンスが急速に高まっている時に、このような少し毒を含んだ遠回しなあてつけをしてみせるところに、アムハラ語的な笑いのセンスが現れていると言えるだろう。「中国人青年」を演じたアジスアベバ在住の韓国人

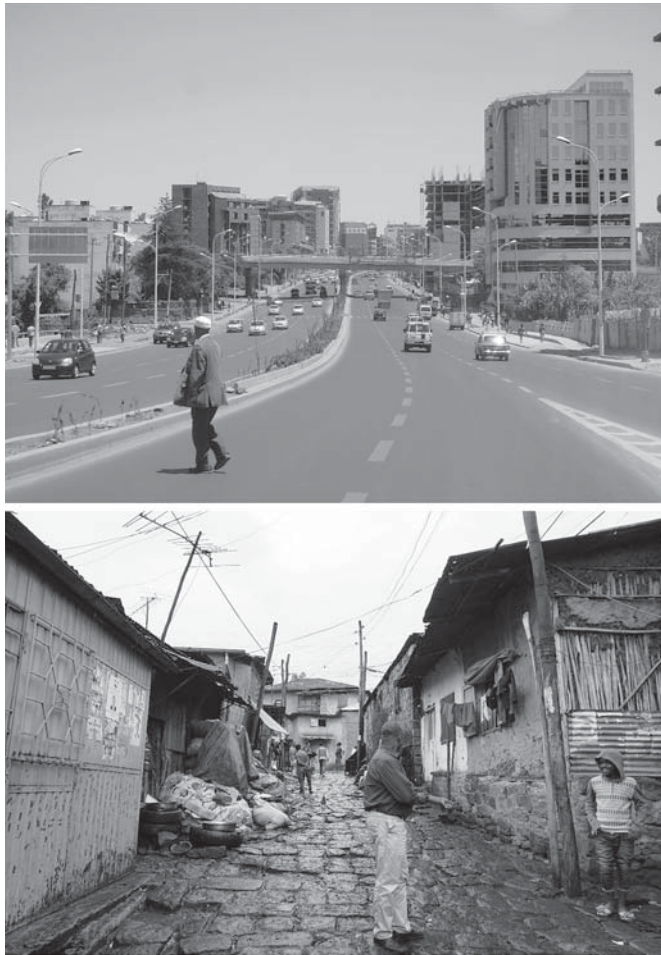


写真 (上) アジスアベバ市内と国際空港とを結ぶボレ通りは、2013年に片側4車線に拡張され、両側には新しいビルの建築が続いている。
(下) 旧市街地の路地には、土壁にトタン屋根の住宅や個人商店が並ぶ。(筆者撮影)

青年の好演も話題となり、『中国製造』は2014年に開催された第1回グマ映画賞で観客賞を受賞した(グマ映画賞とは、アムハラ語映画のキャストやスタッフ、作品を表彰するための映画賞であり、民間のアムハラ語テレビ放送局がスポンサーとなって、米国のアカデミー賞を模した式典が行われる)。

また『笑い事じゃないよ』は、幼い頃の事故で足に障害を持つコメディアン志望の青年が主役である。この作品は冒頭から、長屋暮らしの青年が意地悪な大家にいびられるシーンを面白おかしく描いて笑わせる趣向をとる。さまざまな困難を乗り越え、エチオピア最高のコメディアンを選ぶテレビ番組に出場する権利を獲得した青年は、「みんな、笑い事じゃないんだよ」とつぶやきながら自らの貧乏暮らしをネタにして人々を爆笑させるスタイルを編みだし、優勝を果たして多額の賞金と名声とを獲得する。2008年の英国映画『スラムドッグ・ミリオネア』を

思い起こさせるプロットを³⁾、見事にエチオピアナイズした作品である。

3. 映画『男性問題』とその背景

『男性問題』は、やはり金のない若者が悪戦苦闘する姿を描いた映画であるが、こちらは男女の駆け引きに焦点をあてることで、軽妙なコメディに仕上げている——主人公のアウムロは、アジスアベバの小さな製材工場で働いている。アウムロには結婚を約束したガールフレンドがいたが、彼女はアメリカ帰りの金持ち男を見つけ、あっさりアウムロを捨てる。その彼女から結婚式の招待状が届き、ひどく落ち込んだアウムロを見かねた職場仲間は、「男性問題の会」を結成し、渋るアウムロを無理に引き込んで仕返し計画を練る。結婚式の当日、仲間とともに首尾よく潜り込んだ式場には、美しく着飾った女性たちが次々にやってくるが、アウムロは関心を示さない。仲間に臆病者扱いされて怒ったアウムロが、「俺の胸の内を見せてやるよ」と言いながら、今まで彼が「心を許してひどい目にあわされた」女性たちの写真をポケットから取り出し、「こいつは嘘つき、こいつは裏切り者、こいつは泥棒、こいつは…」と数え上げるシーンは印象深い。すっかり女性嫌いになったかに見えたアウムロだが、直後のカットでは、その式場にいた（どちらかといえば目立たない印象の）ヘリナを見初めてしまう。奥手なヘリナの気をひくため、アウムロは仲間を巻き込んでアメリカ帰りのビジネスマンになります。ヘリナは彼らの嘘を見破りながら、思いがけない行動でアウムロを翻弄する。ふたりの関係が行き詰まったかに見えたとき、彼女はアウムロに、自らの胸の内を明かす…というのが、この作品のあらすじである。作品の後半では、ヘリナを心から愛すればこそ、彼女に嘘をつきとおさねばならないと思い込んで悪戦苦闘するアウムロの姿が、観客の笑いを誘う。

仲良しの男子たちの企みが、ひとりの聡明な女性の登場によってすっかり書き換えられてしまうという筋書きは、戯曲『略奪婚』の再来である。しかし男子たちが生きている時代が違う。ショウの『ウォーレン夫人の職業』が、ビクトリア朝大英帝国の揺るぎない男性中心社会を背景に書かれた物語であったのと同様に、メンギストウの『略奪婚』は、帝政エチオピア時代の揺るぎない男性中心社会を背景とした、エリートたちの近代化物語であった。他方で映画『男性問題』は、二度の革命を経たエチオピアを舞台にして、平等とエンパワメントの時代を生きる労働者階級の男子たちの自助グループの物語なのである。

『男性問題』というタイトルは、EPRDF 政権のもとで頻繁に使われるようになった政策用語のひとつである「女性問題」(*yesetoch gudday*)をもじったものである。EPRDF がかつて軍事政権との内戦を戦い抜いてきた過程では、女性兵士が重要な役割を果たしてきた⁴⁾。そのためか EPRDF 政権は、過去の政権に比べれば女性問題への関心が高い。戯曲『略奪婚』で反近代の象徴として描かれた略奪婚の習慣は、過去の政権のもとでは（特に農村では）黙認されてきたが、EPRDF 政権のもとでは「有害な習慣」(*goji bahil*)のひとつとして名指しされ、取り締まりが格段に強化されている。また 1960 年に制定されたエチオピア民法には、特に結婚生活や相続に関して女性に不利な規定が多く含まれていたが、EPRDF 政権下で制定された 2000 年の改正家族法では⁵⁾、両性の平等を重視した規定に改められた。さらにエチオピアは、中高等教育における男女の就学率の格差が大きいことで知られるが、これも近年は改善の傾向にある⁶⁾。有井は、

エチオピア南部の農村における調査をもとに、中等教育における女性就学率の高まりや女性の就業機会の増加に伴って、村で生きる女性のライフコースに重要な変化が起きていると論じている（有井 2015）。

とはいえ現代のエチオピア社会は、依然として世界でも最も「男性中心的な」社会のひとつとされる。世界経済フォーラムが作成した 2014 年の Global Gender Gap Report のランキング（ジェンダー格差の小さな国が上位にランクされる）において、エチオピアは 142 カ国中 127 位に留まっている⁷⁾。EPRDF の「女性問題」への取り組みが、エチオピア社会のジェンダー構造をどこまで変えたのかという問いに答えるのは容易ではない。眞城は、現政権の成立に協力した元女性兵士たちの中に、体制内で適切な居場所を与えられず、経済的にも過酷な生活を送っている者がいることを報告している（眞城 2007）。この報告を読んだあとでは言いづらいが、思い切って次のようにまとめよう。政府の「女性問題」に対する取り組みは、現代エチオピア社会におけるジェンダー政治のあり方に、少なからずインパクトを与えている——少なくとも男の目には、そのように映るのである。

4. もうひとつのジェンダー政治

『男性問題』というタイトルは、自由と平等を標榜する正統なジェンダー政治とは「別の何か」を示している。これは一見すると、女性のエンパワメントを目指す政策が、エチオピア社会において一定の成果をもたらしつつあることへの、バックラッシュの傾向（女性が強くなりすぎて、今や男性が困っているという気分）を示しているように見えるかも知れない。またエチオピアの男性の間に、そういう気分があることは事実である。エチオピアで改正家族法が施行されたあと、筆者は何人かの男性から、次のような話を聞いた——ある金持ちの男がいた。一心不乱に働いてきた彼は、結婚のことを考える暇もなかった。独身のまま、初老に近い年齢を迎えていた。後悔の念をもって人生を振り返りはじめた彼の目の前に、若く美しい女性があらわれる。二人は結婚したが、それから何ヶ月も経たぬあいだに、女性は離婚を切り出す。裁判の結果、離婚が認められただけでなく、女性への財産分与が命じられた。女性は数ヶ月の結婚で、男性が生涯かけて築いた財産の半分を持ち去った。

この話はいつも、名前も住所もわからない「改正家族法の犠牲者」の身の上に実際に起きた出来事として語られるのだが、この話は事実というより、「女性が強くなりすぎる」ことを恐れる男性たちが流布した都市伝説のように思われる。といっても、ここで問題にしたいのはこの話の事実性ではない。この話は、とりわけ男性の口から語られるときには、本質的に陰惨な話とならざるを得ないのであって、コメディではないということが本稿の議論では重要なのである。

『男性問題』はすでに、経済格差という重い主題を背負っているのであって、その上にジェンダー政治の犠牲者という主題を重ねたところで、コメディとしては成立しない。この作品で描かれる男女の駆け引きは、むしろ重い主題を背景に退かせて、作品をコメディとして成立させるための筋書きである。男女のだまし合いを軸にした筋書きが提示するのは、個人の自立と平等を標榜する「正統な」ジェンダー政治の規範とは異なる倫理的关系の上に稼働する、「もうひ

とつの」ジェンダー政治でなければならない。その倫理的关系とは、狡猾さと誠実さが交錯するところに成立する関係性であると説明して差し支えないだろう。ジェンダー規範は時代とともに変わる。しかし男女の駆け引き＝緊張と緩和をはらんだ関係性は変わらないという洞察が、そこには示されているのである。

狡猾さと誠実さが交錯するところに成立する男女の関係性とはどのようなものか、説明のためにここで、『文違い』という本邦の落語演目を引き合いに出してみたい。『文違い』は、初代柳家小せん（1883-1919）の作とされる江戸落語のハナシであり、ひとことで言えば「男をだます女をだます男」という筋書きである——内藤新宿の遊女お杉は、馴染客の半七に嘘をついて大金を借りる。半七は、じぶんこそお杉の間夫（情人）だと自惚れているが、お杉はその金を、芳次郎という別の男に貢ぐ。ところが芳次郎と相思相愛の仲だと思っているのはお杉だけで、芳次郎はその金を、小筆という別の女に貢いでいる…ハナシの中で明かされるのはここまでだが、その芳次郎も、実は小筆にだまされていると考えた方が良さそうである（松本 2011）。

落語のハナシは、男性中心の世界観を示すのが通例であり、その傾向は『文七元結』のような人情バナシ（世間の道理や人情の描写に焦点をあてた演目）で徹底している⁸⁾。ところが『文違い』の筋書きでは、非対称な関係の連鎖が、結果的に男女関係の倫理的対称性を導き出してしまう。つまり物語の一部分だけを取り出すと、それは誠実な相手から狡猾に金を巻き上げる非対称的な関係の描写でしかない。しかしその描写が連鎖することで、全く異なる世界観が浮かび上がる——男と女は同様に狡猾さと誠実さを併せ持っているものであり、男女の関係は、お互いにだましたり、だまされたりする関係性の連鎖で成り立っているのだというのである。人情バナシが既存の（男性中心の）価値観を肯定し、強化することで人々を泣かせるのに対して、『文違い』は、「もうひとつの」ジェンダー政治を起動することで笑いを取る構造になっている。

5. ジェンダー政治と笑い

二代目桂枝雀（1939-1999）は、笑いの根本にあるのは「緊張の緩和」であると述べている。例えば大きな敵と向かい合うような緊張のあと、ふとその緊張を緩和する展開に出会ったときに、人は笑うのだという（桂 1993:49-50）。この理解は、ジェンダー政治がコメディ作品のなかで果たす役割について説明する上で、たいへん重要なものと思われる。

まず戯曲『略奪婚』について見ると、この作品は伝統と近代の対決という主題を、男女の対決という筋書きに仕立てている。旧道徳にとらわれた男子たちが、近代を体現する女性タファサチの略奪を執行することで、物語の緊張が高まる。ここでタファサチに与えられた役割は、旧道徳を粉砕して、高まった緊張を緩和することである。（もちろんこれを見て笑えるのは改革派エリートであって、守旧派貴族はむしろ怒りを覚えただろう。）ここでは旧道徳に「新しい女」を対置するプロセスが、笑いを喚起する「緊張の緩和」のプロセスに同調している。もっともタファサチに与えられた役割は結局のところ、当時のエリート（男子）にとっての難問である、伝統と近代の対決を提示することであり、それ以上ではないとすれば、『略奪婚』が提示する「新しい女」は表面的なもので、この作品は本質的には、男性中心の世界観から脱却していないと指摘することもできよう。

これに対して映画『男性問題』は、現代エチオピア社会で生きる若者たちの悪戦苦闘の日常を、男女の駆け引きに託したものである。乗り越えられない経済格差への失望が、女性に対抗する男性自助グループの結成というかたちをとることで、物語の緊張が高まる。そこに「もうひとつの」ジェンダー政治（狡猾さと誠実さが交錯するところに成立する男女の関係性）が対置されることで、「緊張の緩和」のプロセスが起動するのである。この作品もまた、本質的に男性のための物語なのだが、それもそのはず——というのも『男性問題』は、エンパワメントと格差の時代に生きる「新しい男性」像を、観客に提示しているのだから。

注

- 1) ハイレセラシエ一世皇帝は、貴族階級を笑いものにしたこの作品を快く思わず、1970年代初頭には、ハイレセラシエ一世大学（現在のアジスアベバ大学）の文化センター（Cultural Center）で『略奪婚』が再演されたことがきっかけとなって、同センターが閉鎖される事件が起こっている（Plastow 1996:98）。
- 2) Provisional Military Administration Council, “Public Ownership of Rural Lands Proclamation” No. 31/1975, *Negarit Gazeta* 34/26, 1975.
- 3) 『スラムドッグ・ミリオネア』では、ムンバイのスラム地区で生まれ育った少年が、テレビのクイズ番組で優勝して高額の賞金を手にする。
- 4) EPRDF の母体となったティグライ人民解放戦線 (TPLF) において女性兵士が果たした役割については、真城（2007）を参照。
- 5) Federal Democratic Republic of Ethiopia, “Revised Family Code Proclamation” No. 213/2000, *Federal Negarit Gazetta* 6/Extra Ordinary Issue 1, 2000.
- 6) エチオピア連邦教育省の統計によれば、前期中等教育（9-10年生）における粗就学率の男女差は、2008年度には11.3ポイントであったのが、2012年度には3.0ポイントにまで改善している（MoE 2013:40）。
- 7) “The Global Gender Gap Report 2014,” World Economic Forum（2015年10月23日閲覧．<http://reports.weforum.org/global-gender-gap-report-2014/>）を参照。なおエチオピアの評価が低い要因としては、男女の就学率格差（とりわけ中高等教育における格差）が大きいこと、次いで女性の政治参加が低調であることが挙げられる。なおアフリカ諸国の中には、ルワンダの142カ国中6位を筆頭に高い評価を得ている国もあり（ルワンダは、エチオピアとは逆に中高等教育における女性の就学率が高く、女性の政治参加も進んでいる）、サハラ以南アフリカでエチオピアより下位にあるのは、ギニア、コートジボアール、マリ、チャドの4カ国だけである。
- 8) 『文七元結』は、三遊亭圓朝（1839-1900）の作となる江戸落語の演目である。左官の長兵衛は、博打のために莫大な借金を抱える。娘のお久は、父を助けるため吉原に身売りをして50両という大金をこしらえる。ところが長兵衛は、吾妻橋で身投げをしようとしていた見知らぬ男の命を助けるため、その金をすべて投げ出してしまう。この長兵衛の行動が周囲の登場人物に評価され、物語が大団円に導かれるのだから、徹底した男性中心の視点を持たねば感情移入することができないハナシである。

参考文献

- Bahru Zewde. 2002. *Pioneers of Change in Ethiopia: The Reformist Intellectuals of the Early Twentieth Century*. Eastern African Studies. Addis Ababa: Addis Ababa University.
- Desalegn Rahmato. 1982. “Agrarian Reform in Ethiopia: A Brief Assessment.” Paper Presented at the 7th International Conference of Ethiopian Studies, April 26-29, 1982, Lund, Sweden.

- Mengistu Lemma. 1964. "Snach and Run or Marriage by Abduction." *Ethiopia Observer* 7 (4): 324-60.
- Federal Ministry of Education (MoE). 2013. *Education Statistics Annual Abstract*. Addis Ababa: Federal Ministry of Education, Federal Democratic Republic of Ethiopia.
- Plastow, Jane. 1996. *African Theatre and Politics: The Evolution of Theatre in Ethiopia, Tanzania and Zimbabwe: A Comparative Study*. Amsterdam: Rodopi.
- 有井晴香 2015「女性の就学選択とライフコース——エチオピア西南部マーレを事例に」『アフリカ研究』88: 1-12.
- 桂枝雀 1993『らくご DE 枝雀』ちくま文庫.
- 滝本和成 1990「森鷗外「蛇」論——<新しい女>をめぐって」『立命館文学』515: 203-14.
- 西真如 2014「エチオピアの開発と内発的な民主主義の可能性——メレス政権の20年をふりかえる」大林 稔・西川潤・阪本公美子編『新生アフリカの内発的發展——住民自立と支援』昭和堂, 56-77.
- 眞城百華 2007「エチオピア・ティグライにおける元女性兵士の現在」『JANES ニュースレター』15: 40-44.
- 松本尚久 2011「『文違い』——本当に騙したのは誰?」『落語昭和の名人完結編 8 十代目金原亭馬生』小学館, 10-11.

